茨城大学教育実践研究19（2000），67－81

ひらかれた幼稚園を考える

―― 地域の日を中心に ――

多田 慧*子・神永 直美*・山路 純子*・吉澤 勲**

（2000年4月28日受理）

Some Discussions on the Kindergarten opened to the Local Community through "Regional Day"

Keiko TADA, Naomi KAMINAGA, Junko YAMAJI and Isao YOSHIZAWA

キーワード：ひらかれた幼稚園　地域の日

平成10年度から2ヶ年計画で「地域と共に―出会い・触れ合い・育ち合い―」を研究主題に全国的に見ても新たな取り組みをしている。そしてひらかれた幼稚園について考え，いくつかの試みを行ってきている。ここでは「地域の日」と名付けられた試みを中心に報告する。その成果は大略以下の通りである。

(1) 地域と触れ合うことで，幼稚園の中では学ぶことのできない体験をし，新たな発見や豊かな体験を得ることができた。

(2) 親子共に活動することで，ともに喜びを見出すことができ，子育て支援に大きな役割を果たすことができた。

(3) 教師にとっても角度の違ったものの見方，考え方に触れる機会となり，これらを日ごろの保育に活かしていくことの重要性を確認できた。

(4) グループに分かれて同じ親子が同じ場に何度も行くことで，イベントとして親しむのではなく，地域の人々との深いかかわりができ，地域を見直す良い機会となった。

Ⅰ はじめに

最近，国立大学教育学部等に附置する附属幼稚園に対しても地域の幼児教育のセンター的な役割など現代社会における多様なニーズに対応した幼稚園運営の弾力化が求められてきている。平成12年4月から実施されている新幼稚園教育要領の中にも，特に留意すべき事項として，「幼稚園の運営に当たっては，子育ての支援のために地域の人々に施設や機能を開放して，幼児教育に関する相

* 茨城大学教育学部附属幼稚園　　**茨城大学教育学部理科教育講座

談に応じるなど，地域の幼児教育センターとしての役割を果たすよう努めること」などが明記されている（文部省，1999）[1]。

上記のような背景を踏まえて，本園では，平成10年度より２ヶ年計画で「地域と共に―出会い・触れ合い・育ち合い―」という研究主題を設定し研究を開始した。平成10年度は，「ひらかれた幼稚園」としての機能を明らかにし，その機能が幼稚園，家庭，地域の間でどのように関連づけられるかを検討した。さらに，ひらかれた幼稚園を支える教育的環境を見直すことによって，実施すべき具体的方策を決定した。そして，ふれあいサタデー，おしゃべり広場，地域の日，コミュニティー広場，フレンドシップの５つの事項について試みを実行した。すでに「コミュニティー広場」に関しては大原ら（1999）によって報告されている[2]。平成11年度は10年度に行った「地域の日」を拡充発展させ，保護者が主体的役割を果たすようなさまざまな試みをとり入れた。本論文ではこの10，11年度における具体的実践例と得られた成果について報告する。

Ⅱ　「地域の日」の概要

「地域の日」は，親子で共に地域とかかわりながら豊かな体験を積み重ねていくということを目的に設定している。

子どもたちにとっては，周囲の自然や事柄，人々に目を向けることで，内面の感覚や感情を揺さぶられるような出会いができるようにという願いをもち，保護者にとっては地域の環境のなかで，子どもの成長を実感したり他の親子と触れ合いを通して自分の子どもへのかかわりを見直す機会が得られるようにとの考えにもとづいて設定した。

Ⅱ－１　平成10年度の課題

本園では，子どもたちにできるだけ豊かな体験を積み重ねてほしいと考え，季節感のある遊びを取り入れたり，積極的に散歩に出かけたり，宿泊保育を実施したりしている。園外保育等の変化や潤いのある活動は普段の保育とは違った環境のなかで，子どもたちはいつもとは違う姿を見せたり，空想の世界を広げながら遊ぶ姿が見られたりするなど成果は大きいと考えている。

子どもたちだけでなく，その中に家庭とも一緒に取り込んでいこうとするのが，地域の日である。親子で自分たちが住んでいる地域の自然や人，場所に目を向け関心をもってかかわることで世界を広げていくきっかけをつくろうという試みである。子育て支援という意味では，教師や他の保護者と触れ合い，語り合い学び合うことで，自分の子育てを振り返ったり，将来的には地域のネットワークがうまれることを期待している。さらに，親子で地域に出かけることで地域の人が幼稚園に関心を寄せたり，得意的技能をもつ人が幼稚園で活躍し喜びを感じる場となることも，地域にひらかれた幼稚園としてのこれからの役割と考えている。

平成10年度は，８回の地域の日を実施した結果，「身近に自然と触れられるところがあったのを初めて知った」「生活している周辺にはいろいろな場所，いろいろな人がいることに親子とも改めて気付いた」「地域のことを全く知らずにいたが，自然や自分の住む町へ少しずつ愛着を感じてきた」等の声が数多く寄せられた。

また，特技を持った身近な人との出会いで「いつもお会いしている人の違う面を発見し，とても感動した」との感想も持ったり，様々な分野の人との出会いについて「普段家庭ではできないことに触れ新鮮だった」の声もあり，通常の保育だけでは体験できないことに触れ，親子で楽しさや喜びを共有し合える場となっていたことがわかる。そのことは，親子で地域に目を向け様々な人との出会いを通して地域に関心を持つという意味で成果があったと言える。

課題としては以下に記すようなことが明らかになった。

- 初めての試みということもあり，単発的なその日限りの活動になりがちであったことから，もっとじっくりとかかわることができるような内容や時間の設定。年間を通しての計画の立案，検討の必要性。
- 保護者が参加しやすいことを考えて土曜日に実施してきたが，週５日制を視野に入れ，今後どのようにしていくかの検討の必要性。
- さらに，地域の自然や人，場所に関する情報の収集や人材の発掘の必要性。
- 多くの親子のなかでそのかかわりを負担に感じているような親への対応の必要性。

Ⅱ―２　平成11年度の計画

前述の10年度の成果と課題をもとに，11年度は以下のような点を意識的に考慮することを目標とした。

- 行事的なその日だけの活動ではなく年間を通して継続的な活動となるようにしたい。
- 地域とのかかわりのなかで，その場所や人，自然が自分にとってかけがえのないものとなるようにかかわりを積み重ねて欲しい。
- クラスの枠を越えた親子同士が顔見知りとなり協力しながら活動に取り組むことで，かかわりがより深まり，主体的に取り組んでいけるようにしたい。

以上のような目標を踏まえ，できるだけ何回も同じ場に訪れたり，人とかかわったりしてつながりを深めていきたいと考えた。そこで，年間を通して同じメンバーが，小人数のグループで目的をもって活動していくようにした。

また，取り組んでいく内容としては，現在の子どもたちの生活全体を見渡した時に，もっと目を向けてほしいことや体験してほしいことを洗い出し次の６つに絞った。

- 体を精一杯動かしその心地よさを味わう。
- 身近な素材を利用して作ることで考えたことを表現することを楽しむ。
- 美しいものに心を動かすことを通して芸術を身近に感じる。
- 四季を通して地域の人の生活の営みに触れながら，様々な事柄に気付く。
- 自然のなかで，自然現象や動植物に関心をもちながら自然を心や体で感じたりそれを取り込んだりして遊ぶ。
- 施設への訪問や活動を通してボランティアの心を感じる。

これらを実現するためには，場所や施設，人材，活動の内容などについての様々な情報が必要である。そのために，周辺の施設について調べたり学芸員の方に相談したり，バスや電車の路線等を調べたり，ボランティアの方々と前もって話をしたり，時間を見つけて十分な情報の収集に努めた。

また，保護者に得意な分野や趣味，技能などのアンケートを取り積極的な協力を依頼し，技能バ

ンクを有効に利用していくことにした。少しずつ多方面からの情報が集まると同時に，「このようなことなら協力できる」と保護者からの申し出もあり，徐々に計画が具体的になっていった。その後，各家庭に参加したいグループの希望を調査し，人数を調整した上で取り組みを発表した。年間6回を計画し，最終回は各グループの活動を報告し合うまとめの回とすることにした。

表1は，11年度の「地域の日」で体験してほしいこと，具体的な活動内容，グループ名を示す。

表1　「地域の日」で体験してほしいこと，活動内容並びにグループ名

体験してほしいこと	活動の主な内容	グループ名（親子数）
体を精一杯動かしその心地よさを味わう	・サッカーを中心にスポーツに挑戦 ・水戸市のサッカーチーム関係の父親の申し出により選手が参加	親子でスポーツ (23)
身近な素材を利用して考えたことを，作ることで表現することを楽しむ	・散策して見つけてきた自然物を使って様々なクラフトに挑戦 ・芸術館のいけばな展を見学後フラワーアレンジメントを体験	わくわく手作り (29)
美しいものに心を動かすことを通して，芸術を身近に感じる	・茨城県立近代美術館で学芸員の先生と共に鑑賞 ・ゲームや遊びを通して表現，製作 ・美術館周辺の散策	身近にアート (25)
地域の人（牧場）の生活の営みに触れ，様々な事柄に気付く	・保護者が経営している牧場に四季を通して訪問し牧場の様子を感じとる ・周辺の自然観察	どきどき体験 (31)
自然を心や体で感じたり，それを取り込んだりして遊ぶ	・小鳥の森を中心にデイキャンプや飯盒炊さん ・材料を集めてキャンプクラフト作り ・電車，徒歩でハイキング	元気にアウトドア (32)
様々な活動を通して，ボランティアの心を感じる	・ボランティアの方に手話の歌等を教えていただく ・周辺地域を散策しながらのごみ拾い ・養護学校や乳児院との交流	きらめきボランティア (19)

Ⅱ－3　実施の経過

教師も興味や関心，趣味や特技などを考えに入れながら希望を出し担当のグループを決めた。グループが決まると，技能提供を申し出た保護者や場を提供してくれる保護者，美術館の学芸員の先生，手話ボランティアの方，利用したい施設，交流したい団体と連絡，交渉をしていった。また，各グループで決めたまとめ役の保護者を通して，考えを聞いたり協力してほしい事柄を伝えたりしながらできるだけ自分たちの活動として定着していくように配慮した。親子の参加の様子や感想などが，グループの教師だけではなく担任やその他の教師にも伝わり次回の計画の資料となるように，

自分が取り組んだ内容，新しい発見，感動したこと，次回にやってみたいことなどを親子で楽しみながら書き込んでいけるような「地域の日・思い出ノート」を作成し配布，終了後に毎回提出してもらうことにした。

Ⅲ　各グループでの取り組み

本章では具体的な各グループの取り組み，活動の報告，その成果と今後の課題などについて詳述する。

Ⅲ－１　「親子でスポーツ」グループ

スポーツを通して，目的を達成するためにみんなで協力しながら進めることの楽しさや，努力しようとする意欲を育てる。

ア　活動内容

参加者　23名　５歳児８名　年中児11名　年少児４名（男児23名　女児０名）

第１回（５月29日）
・登園後那珂川河川敷内市管理のサッカー場へ，親子で自然に触れながら徒歩で出かける。
・ホーリーホックの選手２人にリフティングなどを見せていただいた後，一緒にボールパス，シュートなどで汗をかく。

第２回（６月19日）
・雨天のため様子を見ながら園庭で実施する。
・父親がリードしながらボールパス，ドリブルの練習をした後，雨が降ってきたので映画鑑賞をする。

第３回（７月17日）
・台風通過後でサッカー場が使えなかったため，附属小学校校庭で実施する。
・ホーリーホックの選手３人と共にボールパス，シュート，ゲーム練習をする。

第４回（10月16日）
・親からの提案でホーリーホックチームの勝利を願い，応援メッセージをカードに記入したり千羽鶴を作ったりする。希望者は，休日にホーリーホックチームのＪ２参入をかけた試合の観戦および応援に行くことになる。

第５回（12月４日）
・登園後，那珂川河川敷内市管理のサッカー場へ親子でごみ拾いをしながら向かう。ブラジル体操をした後にボールパス，シュート，ゲームの練習をする。
・お礼の挨拶をする。

第６回（３月４日）
・まとめと発表

イ　活動を通して体験したこと（「思い出ノート」から）

○　「本物」のよさに触れる。
・目の前でサッカー選手（ホーリーホックチーム）のリフティングやドリブル，シュートを見て，その速さに驚き，親も感動した。
・テレビでは味わえない素晴らしさだった。

・もっとうまくサッカーができるようになりたい。
・ホーリーホックの皆さんのプレーをもっと見たい。そして感動を与えてほしい。

○　みんなで協力し合いながら進める。
・親とならすぐふざけてしまうのにコーチ（保護者ボランティア）なら，楽しそうにしかも熱心に取り組んでいた。

○　父親の力を大いに発揮する場ができる。
・父親とたっぷりサッカーをする機会ができて嬉しかった。
・友達のお父さんとのかかわりがとても楽しかった。刺激になった。

ウ　成果と実施上の課題
・父親の参加が多く見られた。
・ボールを家庭で買って「明日から一緒に練習しよう」とはりきっている。
・子どもも父親と一緒にプレーできることが嬉しく，また，サッカーチームとのかかわりを通して，もっとうまくなりたいなどの意欲が出てきた。
・友達の父親がボランティアとして参加してくれているため，親近感がありスポーツ教室とは違う触れ合いがある。
・千羽鶴作りや募金活動などにも熱心に取り組んだが，自分たちも何かできないかという思いを抱き，積極的な姿勢が見られるようになった。
・雨天時に会場確保が困難になるため，内容の検討が必要である。
・年６回の地域の日に，毎回同じ方が保護者ボランティアで参加協力してくださったが，多くの保護者へ呼びかけ広げていく必要を感じた。

Ⅲ－２　「わくわく手作り」グループ

身近にある素材や自然物を用いて物を作る楽しさを味わいながら，その性質などに気付き，物を大切にする気持ちを育てる。

ア　活動内容

参加者　29名　５歳児12名　４歳児10名　３歳児７名（男児２名　女児27名）

第１回（５月29日）
・身近な園庭の草花を摘んだり，それを使って冠やリース作りを楽しむ。
・摘んだ草花をパウチして，しおりをつくる。

第２回（６月19日）
・「水戸芸術祭いけばな展」が行われている水戸芸術館まで散歩する。
・次回のアレンジメントを期待しながら様々ないけばなを見たり，花のスケッチをしたりして楽しむ。

第３回（７月17日）
・自宅の庭の花や園庭の草花，身近な材料を使ってフラワーアレンジメントをする。
・器も身近なものを工夫して作る。

第４回（10月16日）
・自然のなかで見つけた木の実等を使ってホットケーキピザ，白玉だんご，クレープなどを作る。
・畑のハーブを摘んできてお茶作りをする。

第５回（12月４日）　・クリスマスのリース作りをする。
　　・小鳥の森で見つけた自然物（木の実，木の葉など）を使って作る。
第６回（３月４日）　・まとめと発表

イ　活動を通して体験したこと（「思い出ノート」から）

○　自然のもつ美しさや不思議さに触れる。
・園庭にたくさんの自然があることに驚いた。（木・葉・花・石）
・土や花の息づかいを感じた。
・木陰は涼しい，花は美しい。
・シロツメクサは小さい花びらがいっぱい集まってできていたことを発見した。
・あまり日が当たらない所でも草花が生い茂っていて，生命力の強さを感じた。
・花のもつ美しさ不思議さを感じ，興味が深まった。

○　共に生活する中で大切にしたり，いたわりの気持ちをもつ。
・植物も生き物である。植物も季節と共に変化するなど自分と植物のかかわりに気付いた。
・地面に近いところで草花を摘んでいると，いろいろな虫も生きていることを発見。
・作品は「とっても大事だから触らないでね」と言い，目で見たり匂いを嗅いだり感覚で楽しんだ。

○　自分の身近な素材の特徴に気付いたりそれを使って工夫する。
・他の母親が落ちていた木の枝で上手にリースを作っていたのが参考になった。
・いろいろな材料を使うことでよりイメージが広がることがわかった。
・草花を使ってネックレス，ティアラなどができることを発見した。
・こんなに身近なものがとてもすてきなものに変身した。
・買ったものでなく自然のなかの物でゆっくり楽しめた。

○　遊びを伝承し伝える。
・草花を使っての伝承遊びができた。
・他の母親から冠の作り方を教えてもらった。

ウ　成果と実施上の課題

・「わくわく手作り」では単純に親子で手作りを楽しむだけでなく，身近な素材を大切にし生かすことでまた別のものに生まれ変わっていくことに気付いたり，生かすために知恵を働かせたり工夫しようとする気持ちが起きてきた。そこには同時にその物に対する思いやりやいたわり，大切にする気持ちが育っていくというように心の豊かさにつながっていくことが明らかになった。
・自由に何でも手に入る時代に生活していると見失っていることが多い。一つ一つを見直してみることによって新たな発見や気付きを体験できる場になるような積極的な工夫が必要である。

Ⅲ－3　「身近にアート」グループ

美術館に何度も通うことを通して，美術館の雰囲気を身近に感じるような態度を育てる。

ア　活動内容

参加者　25名　5歳児11名　4歳児11名　3歳児3名（男児12名　女児13名）

第1回（5月29日）
- 登園後バスに乗って茨城県立近代美術館に行く。
- ロダンの彫刻の前で学芸員の先生の話を聞く。彫刻を触らせてもらう。
- エミーの像の前で，「何歳か？」など考える。
- おやつを芝生で食べ，他のクラスの親子とも自然なかかわりが見られる。

第2回（6月19日）
- 美術館前に集合する。学芸員の先生の話を聞く。
- エントランスホールの床の上に紙を置き，2色のクレヨンを使ってこすってみる（何かに見えてくる）。その後，控え室で描いた絵を見る。
- 前田完治展を見る。常設展示室へ行き自分の好きな絵を見つける。
- 何百年も前の大事な絵なので絶対に触らないこと，見ている人の前を通ったら失敗ということの話を聞く。
- 控え室でおやつをいただく。

第3回（7月17日）
- 美術館前に集合する。学芸員の先生の話を聞いた後，好きな絵を見つけてワークシートに描き込む。
- 千波湖の近くで遊ぶ。

第4回（10月16日）
- 美術館前に集合した後，東山魁夷展をみる。
- 石に色をつけてニスで塗り，出来上がったものをみんなで見る。

第5回（12月4日）
- 附属小学校2年生が作った小さな美術館を見に行く。
- セザンヌやゴッホの複製画を見る。
- 幼稚園に戻り学芸員の先生の似顔絵を描く。
- 「ありがとう」の会をし，似顔絵をプレゼントする。

第6回（3月4日）
- まとめと発表

イ　活動を通して体験したこと（「思い出ノート」から）

○　美術館は楽しい所だと感じ親しみをもつ。
- 学芸員の先生から話を聞き，美術館が特別のところではないと感じた。
- 彫刻に触れ冷たい感触や叩いた時にコーンコーンと音が響くことを発見した。
- 絵の見方にはいろいろあり，楽しく見る見方を教えていただき，なるほどと思った。
  （指を丸めてのぞくと見えないものが見えることや好きな色を探すことなど）

○　社会の中に自分たちがいることを感じ取り公共の場でのルールに気付く。
- 200年も前の絵を大切に次の世代に繋いでいくということがわかった。
- 絵を見ている人の前を通るのは失敗だということを学芸員の先生が穏やかに伝えている姿に感動した。
- バスの乗り降りは迷惑にならないようにする。

○　自分たちの町の自然に気付く。
・桜川にコクチョウや魚がいたこと，ツバメが飛ぶ練習をしていたことを発見した。
○　角度を変えてものを見る。
・美術館のエントランスホールの天井が電灯だけではなく天窓になっていて外の光が入っていたこと。
・前に立ち好きな絵はどれにしようかと真剣に見ていた。
・全体を見るだけでなく，一部分を見る楽しさに気付く。
○　母親が子育てにゆとりをもつ。
・親自身が美術館に親しみ，子どもとともに楽しむことができた。

ウ　成果と実施上の課題
・学芸員の先生に話を聞き，角度を変えた見方や絵に触れる機会が多くなった。
・美術館が身近なものとして感じられるようになり，子どもと気軽に出掛ける保護者が増えた。
・保護者の考えの中には，「絵を上手に描くためには」といった思いがある。本物に触れることの感動を大切にし，一緒に見る楽しさを味わうことに気付くようにする必要がある。
・全学年で美術館に出かけたが，３歳児には難しいのではないだろうか。年齢のことなど，今後考慮する必要がある。

Ⅲ－４　「どきどき体験」グループ

四季を通して牧場を訪れ，自然観察をしたり牧場の様子を見たりして生活の営みとしての牧場に触れ，様々な暮らしがあることを知ると同時に，自然の不思議さや美しさに触れ，感動する心を育てる。

ア　活動内容
参加者　31名　５歳児11名　４歳児13名　３歳児７名（男児16名　女児15名）

第１回（５月29日）
・登園後，水戸駅からバスでＴ牧場まで行く。
・Ｔさんの案内で牛舎を見学する。牛を観察(生まれたばかりの子牛もいた)する。危険個所の説明を聞き，牧場内での約束ごとをする。
・それぞれに牧場内の散策（トウモロコシ畑の様子，虫探し）をする。
・草取りしながら何気なく安全に気を配ってくれていたおばあさんにお話を伺う。

第２回（６月19日）
・雨天のため牧場での活動は見送る。小鳥の森，保育室で活動する。
・天気の様子を見ながら，自然散策ゲーム（カードと同じ植物を探しに小鳥の森へ）をする。親子同士で自己紹介をし合う。

第３回（７月17日）
・それぞれバスで牧場へ。夏の牧場の様子を見学（トウモロコシの生長），牛の観察をする。
・自然観察員のボランティアの方と共に虫探しやセミの抜け殻探しをしたり，植物観察をしたりする。様々な話を聞く。たくさんの虫，抜け殻を見つける。

第４回（10月16日）
・それぞれバスで牧場へ。秋の牧場の様子を見学，牛の観察をする。

・自分でバターを作る（生クリーム，生ミルクを用意してきた容器に入れ，20～30分程振る）。バターをつけたパンと牧場のミルクをおやつにいただく。

第５回（12月４日）　・それぞれバスで牧場へ。冬の牧場の様子を見学，牛の観察をする。

・みんなで篠竹を採り，たき火をする。サツマイモ，マシュマロ，アウトドアケーキを焼いて食べる。牧場主さんを囲んで「ありがとう」の会をする。

第６回（３月４日）　・まとめと発表

イ　活動を通して体験したこと（「思い出ノート」から）

○　牧場で生活する人と出会い，暮らしぶりに触れる。

・自分の住んでいる周辺にもこんなに自然があることに気付いた。

・ぼくと違って牛はＴさんに慣れていて，甘えたように何度もなめていた。

・牛のエサは，外国からのものを与えていることを知った。

・蜂蜜を取る機械や蜂の巣箱，蜂をおとなしくさせる器具など，農機具は全てシンプルで機能的だった。

○　動物と触れ合い親しみをもつ。

・牛って大きいな。牛の舌はとても長くてびっくり。舌を使って上手に草を口に入れる。頭をさわったら鼻の穴をヒクヒクさせていた。

・赤ちゃんがおなかにいる牛は，重たそうで大変そうだった。

・牛のおしっこは，滝のように出ることにびっくりした。

・牛に手をなめてもらったことが印象に残った。最初は怖かった。でも勇気を出してさわってよかった。牛乳がおいしかった。特別な味がした。

○　自然との触れ合いを通して自然の偉大さを感じる。

・いろいろな葉っぱがあることがわかった。

・久しぶりに自然の中で子どもと戯れて楽しかった。

・季節や天候によって違って感じることはとても楽しかった。

・アリの巣を観察していたとき，卵を抱えたアリが出てきた。

○　体験の広がりを実感する。

・新しいいろいろな体験をしたことで一日中わくわくした。

・体験が印象深かったので，帰宅途中も元気に歩いて帰れた。

ウ　成果と実施上の課題

・四季を通して牧場を訪れたことで，折々の自然の様子を観察することができ，少しでも暮らしに密着した見方ができるようになった。

・受け入れてくださった牧場に対しての参加者のマナー，気持ちの表現を考えていくことが必要である。

Ⅲ－５　「元気にアウトドア」グループ

アウトドア活動を通して地域のよさに気付き，自然と触れ合う中で好奇心や探求心を育てる。

ア　活動内容

参加者　32名　5歳児17名　4歳児9名　3歳児6名（男児16名　女児16名）

第1回（5月29日）　・旧県庁のお堀で親子で草花や虫に触れながら思いきり体を動かして遊ぶ。

第2回（6月19日）　・園内（ちびっこ広場）でアウトドアクッキングをする。親子でかまど作りや竹でテーブル作りをする。

第3回（7月17日）　・大洗鹿島線に乗って大串貝塚ふれあい公園へハイキングに行く。

第4回（10月16日）　・園内（ちびっこ広場）で飯ごう炊さんをする。近くにテントを張って，デイキャンプをする。

第5回（12月4日）　・いろいろな凧作りに挑戦し，那珂川の河川敷で凧揚げをする。

第6回（3月4日）　・まとめと発表

イ　活動を通して体験したこと（「思い出ノート」から）

○　地域の良さに気付く。

・遠くだけでなく，身近な所でも子どもにとって新鮮な刺激があり，遊び方を見つけていると改めて認識した。

・身近な所にも四季を感じる場所があると思った。

○　自然と触れ合う。

・草の上でおにぎりを食べる楽しさを知った。

・オオバコを使ったすもうや虫探し，花冠作りが楽しかった。

・見つけた虫に対し「何だろう，なぜだろう」と疑問に感じることをきっかけに，いろいろな意見が出て，知識を身につけていくのが楽しかった。

・虫が身の危険を感じて動かなくなったり，丸まっている姿を見て感動していた。

・普段身近にあるものを使ってテーブルを作り出していく知恵は，アウトドアの原点だと思う。

○　子どもの成長を感じる。

・いつも親の側にいた娘が積極的に友達に話しかけ，子どもの世界をきちんと作って遊んでいることに驚いた。

・「危ない」と決めつけていた刃物や火にも，注意を守り危険を避けることがきちんと身に付いていることに驚き嬉しかった。

・父親が薪割りで手の皮がむけてしまたとき，バンドエイドを持ってきてくれた。

・少ししか食べない子どもが大人と同じ量をおいしいと食べたことが嬉しかった。

・友達に声をかけたり手伝ったりして，優しい一面を見られた。

・前回より火を起こすことに慣れ，子どもたちも手伝おうとしている姿があちこちで見られ積極性が養われていると感じた。

・あまり料理の手伝いはさせなかったが，これからはさせてみようと思った。

○　探求心を育む。

・作った凧を揚げるときに風向きや凧糸の引き方を考えたりと，子どもなりに工夫している姿に驚いた。

・一緒に作った凧を家に帰ってからも公園へ行って飛ばし，姉たちまでも順番に飛ばしていた。

身近な物で簡単に作れることが分かってまた作ってみようと思った。
・障子紙を使った凧を作ったことで，丈夫さに驚いた。
・薪の並べ方（空気の層を残すように組んで並べる）を知った。

ウ　成果と実施上の課題

・戸外での活動が主になるため，とっさの悪天候にも対応できるように園内でできるロープ結びやおもちゃ作りの準備をするなどして対応してきた。ただし食べ物を扱うときにはすぐに中止できるわけではないので，その対応が課題である。
・地域のよさを知ることを常に念頭においた活動を心掛けてきた。アウトドアクッキングでは普段味わえない体験を親子ですることはできた。しかし地域という意味は薄かったように感じる。活動そのものは楽しく，家族以外の人との触れ合いは多くなったが，今後地域とのかかわりをどう深めていくかが課題である。

Ⅲ－6　「きらめきボランティア」グループ

ボランティア活動を通して，様々な人との出会いを経験するなかで自分にできることは何かを考えたり，それに素直に取り組んでみようとする態度を育てる。

ア　活動内容

参加者　19名　5歳児5名　4歳児9名　3歳児5名（男児5名　女児14名）

第1回（5月19日）
・手話を学ぶ。
・大手橋下のごみ拾いをする。
・戻ってからごみを分別する。（缶95個，ビン7本，タバコのすいがら多数）

第2回（6月19日）
・バスで保和苑に行き，住職からお寺やアジサイまつりの由来の話を聞く。
・アジサイを見る。
・ごみを拾い，分別する。（缶7，ビン4，花火，菓子袋，タバコのすいがら）
・ごほうびに駄菓子やさんで100円の買い物をする。
・手話を学ぶ。

第3回（7月17日）
・バスで附属養護学校へ行く。
・小学部の児童の授業を参観する。
・一緒に遊ぶ。手話で歌を歌う。
・養護学校のスクールバスで戻る。

第4回（10月16日）
・日赤乳児院について話を聞き，関心を持つ。
・自分にできることは何かを考える（子どもに，親に）。
・手話の復習をする。
・安全であって，喜んでもらえるものを作ることにする。
・大手橋下のごみ拾いをする。（ごみ13kg）

（11月8日～11月30日）
・乳児院への贈物製作を全員に呼びかけ協力を得る。
（エプロン 65・人形 4・マラカス 11・ボール 19・おもちゃ 18・いす 6・雑巾 24）

第５回（12月４日）　・日赤乳児院を訪問し，贈物を梱包して届ける。
・一緒に遊んだり，お手伝いをしたりする。
・帰る道々，ごみを拾いながら戻る。
・手話で歌を歌う。
第６回（３月４日）　・まとめと発表

イ　活動を通して体験したこと（「思い出ノート」から）

○　ボランティアの風にふれる。
・手話は，同時に言葉を口にすることで，さらに相手に気持ちが伝わると言うことを知った。
・手話をもっと勉強することで，本当のボランティアの意味を学べるように努力したいと思った。
・「どうしてこんな所にごみがあるのかなぁ。」と拾い集めたごみの多さに驚き「あぁすっきりした。」と感じた心をずっと持ち続けてほしい。
・保和苑で，周りの人から「ご苦労様！」と声をかけられてうれしい気持ちになった。

○　公共の場を意識して眺める。
・ごみは拾ってみると意外にたくさんあり，一人一人の意識改革が必要であると思った。
・ごみを捨てるのは簡単だけれど，一つ一つ拾うのはたいへんである。
・保和苑のアジサイは，ごみが捨てられるのを防ぐために植えられたそうで，「きれいなところは汚したくないよね」と子どもと話し合った。「汚しておくとみんな捨てて行くんだね」と子ども心に気付いたようである。

○　気持ちの高まりを実感する。
・最近は，道を歩いていてもごみが気になり，いつもごみ袋を持って歩き，最低限自分たちのごみは持ち帰るようにしている。
・他の人の役に立つことがしたいという気持ちになった。募金活動にも関心が向くようになった。
・拾った缶の数だけ，どこかに花の種を蒔きたい。
・一番大事にしていたり，一番可愛くできた物をプレゼントしようという気持ちに子どもの優しさが感じられて嬉しかった。
・自分に何ができるかはっきりしたものはつかめていないが，少しずつ目立たない小さなことから始めようと思っている。

ウ　成果と実施上の課題

○　ボランティア活動を通して，何を心に刻んでいくか。
―　手話を学ぶことから　―

A子の母：「覚えた手話を，聾学校で試してみたいと思うのですが。」
教師：「手話は，英語のように覚えたことが外国の人に通じるかどうか試してみるというのとは本質的に違いますよね。」
A子の母：「ええ？…」

教師：「手話は言葉での表現がうまく伝わっていかない人が，手や指，口の動きや表現を使って気持ちを伝えていく言葉に代わる方法ですよね。もし，私たちの周りで手話を話そうとする人がいたとき，変なことと感じて違和感を持ったり，拒否反応を示したりすることなく，その違いもあたりまえのこととして温かく受け止められるようになってほしいと思っているんですよ。障害のある人にとっては，とても重要な手段であることを理解した上で，手話を使ってほしいのです。」

A子の母：「ええ…」とは言いながらも，納得していない様子。

・翌日，提出された思い出ノートに，「手話ってお口のきけない人ともお話できてすごいな。」というA子の言葉が母親の手で記されているのを読むと，人への思いやりやいたわりが自分を中心に考えられていることに気付き，ここから微妙なずれが生じているように思われる。ボランティアについて，親子が体験を通して共に考え，学ぶ場としていきたい。

― 養護学校や乳児院の訪問から ―

・「障害がある」という表現をすると，それこそ差別だと言われるのでかかわらないようにしがちである。世の中にはいろいろな人がいてお互いがいたわり合い助け合って生きてこそ，人間社会なのだということを教えていきたいと思う。

・2歳を過ぎても親元へ戻れない子どもは，里親の元に行くという現実に，涙が出そうになったのを必死でこらえた。涙を見せることがとても失礼になるように感じた。ボランティアという言葉の意味を少しずつではあるが理解してきたように感じる。

・ボランティアといっても押し付けではいけないこと，自分たちが優位であってはいけないことを感じ，自分自身を見直すよい機会になったと思う。

○　活動は，すべてを親子で行うことでよいのか。

・第3回の養護学校や第5回の乳児院の交流については，訪問させていただく場所の状況によって親子で実施する方がよいのか，教師と子どもがよいのかを検討する必要がある。

・年齢が低い場合には，慣れていない環境に戸惑いや緊張を感じやすいが，親も一緒であるとすんなりと溶け込んでいけた。

・大勢で出掛けると，小さい子どもはびっくりして泣き出してしまい，落ち着くまでに時間がかかった。小人数で度々出かけていき，交流を深めていくようにしたい。

○　ボランティアを生活プランに位置付けることについて。

・ボランティアの意識は，言われたり，教えられたりして理解することではなく，体験しながら感じとっていくものである。異なる場に人数を分散するなどして，全員が体験していけるような計画を組み込んでいきたい。

・特に身近な場所でごみを拾うことは，子どもの発達から適当な活動であり，地域に直に触れ，人の善意が感じとれる体験となる。園外に出掛けるとどのような場でも，落ちているごみのことが気になるようで，主体的に活動を展開するようになってきているので，こうした芽を大切に育てていくようにしたい。

・幼児期の子どもだからこそできること，その存在がもつ教育的な意義を確認しながら，年齢を考慮して無理なく，継続していけるような計画を組んでいく必要がある。

Ⅳ まとめ

私たちは，この研究を通して幼稚園の中だけでは学ぶことのできない部分を地域に求めること，側面から親の子育てを支援することで，子どもとの対応だけでは育ちの保障が十分でない部分を補っていくことが，子どもの健やかな育ちと保育の充実を考えるとき重要だということが明らかになった。

そして，そのような地域とのかかわりや子育て支援（地域にひらかれた幼稚園づくり）のなかで重視すべき体験として次の５つがあげられる。

(1) 生活の広がり，(2) 見る目のしなやかさ，(3) 情報の獲得と判断する力，(4) 共感の喜び，(5) 体験の補完。

特に本年度の「地域の日」では，地域とのかかわりに関して，私たちが考えていた以上にその成果を認めることができた。ボランティアという分野は教師も手探りの試みであり，その趣旨が親や子どもにどう理解されていくのか疑問であった。しかし，回を重ねるうちにボランティアという風が心を揺さぶっていたことが，活動への取り組みの様子から明らかになった。

その他にも，四季を通して牧場へ訪れ人々の営みに触れたり，美術館の学芸員の先生との触れ合いから何気ないものにも心を止めるようになったり，ホーリーホックの選手とのかかわりからサッカーへの憧れを募らせたりした。

このような親子での体験はどれも，幼稚園の中だけでは得ることができない体験である。それを親子で体験したことで，お互いの体験が重なり合い共通の喜びを見出すこととなった。「（ボランティアの活動は）地味な活動だったが，回を重ねるごとに子どもの育ちが見えてきた。そして自分の見る目も違ってきた」との感想も寄せられた。親子共に活動することも，子育て支援のひとつの方法であることが明らかになった。

また地域とのかかわりは，教師にとっても角度の違ったものの見方，考え方に触れる絶好の機会となった。様々な情報を得て，地域環境をどう活用していくかを考えていくことは，保育を考えていく上で重要である。

今後はさらにこれらの試みを継続し，問題点の改善を図りながら取り組んでいきたい。

引用文献

1）文部省．1999．『幼稚園教育要領解説』　（フレーベル館，東京）pp. 180―182.

2）大原いづみ・多田慧子・山路純子・吉澤勲・新井孝喜．1999．７．「ひらかれた幼稚園を考える―コミュニティー広場を通して―」『茨城大学教育学部教育研究所紀要』30号，pp.27－35.